

フィールドワーク便り

大地が揺れる，主体も揺れる

—トルコ・シリア地震に関する運命論の転回と忘却をめぐって—

永田真子*

「神の命令だ。これは私たちの運命だ。」

これは2023年2月6日に発生したトルコ・シリア地震で甚大な被害を受けたトルコ南東部の街サマnderのコンテナハウス（写真1）を訪れた筆者に対し、住人の老婆が途切れ途切れに絞り出した言葉である。老婆は震える声で言葉を紡ぎながら、「今・ここ」に筆者が本当に存在していることを確かめるかのように震える手を筆者の顔に伸ばして頬をそっと撫でた。老婆は筆者との身体的接触を通して互いの人生の行路の境界を越えようとしているかのようでもあり、彼女が生きる「今・ここ」ではない世界に開かれた関係性を求めているかのようでもあった。老婆は、（筆者に似ているという）娘、夫、嫁の3人を地震で亡くし、年老いてひとり残された境遇が辛いこと、大地が揺れて多くの人々が死んだが自分には何もできないこと、モノも家もすべてがなくなり何も残らなかったことを、悲しみを押し込めたようなつぶれた声で訥々と語った。筆者は焼けつくような重苦しい痛みを襲われ涙がこみ上げてくるのを気づ



写真1 サマnderのコンテナハウス

かれまいと、老婆と目を合わせることができずにいた。老婆は「私の娘よ、さよなら」とつぶやき、小さく手を振って去り行く筆者を見送った（2023年8月22日、フィールドノート（以下FN）より）。¹⁾

歴史の中のトルコ・シリア地震

冒頭のやりとりの舞台となったサマnderは宗教的なコミュニティや伝統的な慣習が深く息づく街であり、シリア・トルコ国境付近に位置するためにアラビア語とトルコ語が日

* 筑波大学大学院人文社会科学研究群

1) 本研究の一部は、科研費22K21372の支援を受けて実施した。

常に話されている。サマnderが位置するハタイ県はかつて交易と巡礼の中心として栄えた交通の要衝であり [Gündüz *et al.* 2013], 現在でも北アフリカから中東に至る幹線道路が地平へと長くまっすぐに伸びている。このような歴史的経緯と地域性から、アラブ人、トルコ人、アルメニア人といった民族に加え、イスラーム諸宗派、キリスト教徒、ユダヤ教徒など異なる文化や宗教をもつさまざまな人々が混住しコスモポリタンな文化を作り出してきた。メソポタミアの肥沃な土壌に育てられた農作物は美食の伝統を作り出し、地域経済は農業と観光業によって支えられてきた。先史時代より豊かな資源をめぐって幾度も戦乱を乗り越えてきた地域であるためか、人々は独立心あふれる気質をもっている。

私たちはここにいる。私たちはいなくなっただけではなく、ここにいるのだから、誰も助けてくれないなら、私たちは自分たちで立ち上がる、と言っているんだ。(2024年2月13日、40代男性)

一方で、彼らは自立的であると同時に人々との緊密な関係性に基づく日々の生活を何よりも大切にしている人々でもあった。

生活の中にはこのような活動、つまり市民社会が行なう活動がたくさんあり、以前は礼拝所に集まることが多かった。(…) 私たちは、この場所(教育複合施設)をある意味生活空間として考えている。私たち

は、すべての物事は生活と絡み合っているべきだと考えているからだ。つまり、教育は生活の一部なのだ。(2024年1月30日、40代男性)

文明の中心地として栄華を誇ったハタイは地震によって廃墟と化し、「ハタイは地図から消えた」という語りの人々の間に流布していた。すべてを焼き尽くすような灼熱の中で車を降りると動物の死骸から発する腐臭が鼻を突く。低い音を立てる重機によって建物が取り壊された跡には、がれきの中に埋もれたかつての生活の残像を見出せる。そして残像を美しく浮かび上がらせるように粉塵が舞う。再び目を凝らしたら、結局は視界が見通せないほどの砂埃の層がそこにあっただけだった(写真2)。



写真2 がれきに埋もれた戸棚にあった結婚式の招待状

政治・経済・社会情勢の目まぐるしい変化の中で現地では「100年に一度の災害」と呼ばれるトルコ・シリア地震が発生したことは、専門家と地域住民の双方に震災を深刻な問題として注目する状況をもたらした。2018年に災害緊急事態対応庁が再編され政府直轄になったことで、災害対応が政府主導に一本化された。これに伴い、政府は2ヵ月で10万戸のコンテナハウスの建設を目指す画一的な復興計画 [Hürriyet TV 2023] を打ち出した。法整備や行政の連携の不足による初期対応の遅れなどさまざまな問題が指摘されるものの、地域によっては統制が取れた物資の配給やコンテナハウスの建設が実施され、画一的な政策による迅速な対応が人々の間で評価されていた [Kimura 2024: 9]。

危機状態としての主体の揺らぎ

一方でこのような方針により軽視されてきたのは、人々の多様な生活環境や社会関係が作り出す個別の状況であった。個人や国内外のさまざまな専門団体による自主的な活動が規制されたのみならず、コンテナハウスが整備され支援が行き届いたように見える場所においても、住民の意思をめぐる新たな問題が起こっていた。倒壊の危険性が忠告されているにもかかわらず、コンテナハウスでの生活を拒んで損壊した家や屋外のテントに住み続ける被災者が多く存在し、客観的な情報や快適な生活環境を求める合理的思考のみが人々の行動を決定しているとは言いがたい状況であった。

コンテナがあるなら、私の庭に置いてくれ、と言う。高齢者は庭以外の場所には行きたがらない。私はここに果物の木を植えているし、鶏も飼っているし、牛も飼っている、どこにも行きたくない、テント村にも行きたくない、と言う。行くところが無い人はコンテナに行くしかないが、場所があれば、小さな家があれば、そこを離れたがらない。(2024年1月23日、40代男性)

整備されたコンテナハウスでの暮らしを選択することは、今まで築いてきた生活世界における人やモノとの関係性を失うということでもあった。震災後、人々の間で関係性の喪失が問題となっていたことは、複合施設における以下の語りにも見て取れる。

3回目の地震が起きた早朝(2023年2月20日)は凍えるような寒さだった。その朝、ひとりの男性が外庭の門から玄関に入ってきた。とても寒かったのに、足にはスリッパを履いていて、パジャマのような薄着で、目は腫れぼったく、一晩中眠れなかったようで、そんな腫れぼったい目をしていた。その男性が来たので、私は彼の方へ歩いて行き、私に力になれることはあるか、必要なものはあるかと尋ねた。すると彼はこう言った、何も欲しいものはない、と。彼は地震でひとりぼっちになったような気がして、誰かが助けてくれるような気がして、どうしようもなくなって、ここに来た。(…)彼はただ私たちに会いに来た

んだ。(…)だから私は言ったんだ、来て、座って、お茶でも飲んで、必要なら私たちはここにいるよ、って。(2024年1月30日、40代男性)

震災によってかつての生活世界を失うことにより、他者やモノとの関係性によって構築されてきた社会生活の基盤も失われてしまった。そのような喪失によって被災者が直面したのは、社会的つながりの中で生きる者としての主体が揺らぐという危機であった。

運命論をめぐる視点の転回

このような状況を踏まえ、冒頭の老婆の言葉に立ち返りたい。「被災は運命だから仕方がない、だから忘れる」というトルコ社会の災害理解をめぐる運命論の存在は先行研究においても指摘されてきた[木村 2013: 74-75]。今回の調査でも、事前の訓練により搜索救助活動の中心となったセイハン市役所の役人は忘れるという行為をトラウマから逃避するための方策として指摘した(2023年8月21日、FN)。また、被災地域で唯一空港が破壊されなかったために支援物資の物流拠点となったアダナ市役所の役人は「家が全焼すると、人々は2~3時間後には空腹になり、灰の中で昼食を食べる」ということわざを用い、運命論に基づく忘却を人々の無意識の気質や文化による日常への埋没であると説明した(2023年8月21日、FN)。

しかし、相互行為を通して協働で構築される社会的行為という視点から冒頭の語りを捉え直すとき、無知や怠惰、宗教的盲信、文化

的気質、逃避や諦めとは別の新たな側面が浮かび上がる。冒頭の語りには、「忘れる」という行為を起点とし、運命の主導権を神に移転するという相互行為が見られる。確かに人々にとって被災は「運命」の一部であり、人知の及ばぬ不確実なできごとだったかもしれない。しかし同時に、このような人知を超えたはたらきは主導権の移転という操作により、苦境を乗り越え新たな局面を切り開く際には幸運の再分配と新たなつながりの構築の点で無限の可能性をもつものとして理解される。運命をめぐる視点を転回しその力を未来に向かって作動させることは、自分の不幸も他者の不幸もすべて受け入れて赦す(忘れる)とき、初めて可能となるのだろう。

人々は社会的存在としての主体の揺らぎに直面して、新たな希望と未来に向かって主体的かつ創造的に存在し続ける力を希求する。冒頭の語りは、自力では予想もつかない新たな関係性とはたらきの創出を期待する、生活世界への積極的な働きかけの語りであったとも解釈できるのではないだろうか。

フィールドで出会う一見不可解なできごとをいかに描くのか。そのときに必要なもまた、自力で予想可能な範囲、すなわち自分が生きる社会に存在する無意識の価値の体系や規範意識を超越する視点の転回なのかもしれない。本事例の解釈を通して、「運命」の導きにより今日までに出会った、そしてこれから出会う他者とのつながりの中で形成される主体としての「私」を省みたいと思った。

引用文献

外国語文献

Gündüz, A., İ. Gökhan, S. Hatipoğlu and G. Bahadır. 2013. *Hatay Tarihi*. Antakya: Hatay Valiliği.
Hürriyet TV. 2023. ([https://www.hurriyet.com.tr/video/cumhurbaskani-erdogan-acikladi-hedef-](https://www.hurriyet.com.tr/video/cumhurbaskani-erdogan-acikladi-hedef-2-ayda-100-bin-konteyner-kurmak-42230035)

2-ayda-100-bin-konteyner-kurmak-42230035>
(2024年4月15日閲覧)

Kimura, S. 2024. 6 Şubat Depremi Üzerine Saha Raporu. Ankara: Kalkınma Atölyesi.

日本語文献

木村周平. 2013. 『震災の公共人類学—揺れとともに生きるトルコの人びと』世界思想社.

ベトナム・ホーチミン市での文献探しの旅

金 知 雲 *

2023年、コロナ禍による制限が緩和して以来、幾度かの短期フィールドワークを経て、ようやく2024年6月から1年間のベトナムでの現地調査が実現した。¹⁾ 短期フィールドワークでの試行錯誤を経て、現在私はベトナムのホーチミン市内を歩き回り文献探しに邁進している。以下では、ホーチミン市での文献探しに関する情報と経験を紹介する。

第二国立公文書館 (*Trung Tâm Lưu Trữ Quốc Gia II*)

現在、ベトナムには4つの国立公文書館がある。その4つの国立公文書館のうち、私はホーチミン市の1区 (*Quận 1*) のレズ

アン通り17A番地 (*17A Đường Lê Duẩn*) に位置する第二国立公文書館を利用している。当館は南北分断期の南部関連文書に特化しており、私はそこで20世紀の仏教史に関する一次史料を収集している。

文書の種類としては公務員が作成した公文書が多く、たとえば大統領への報告書や警察による動向報告書などがあり、公文書以外には仏教徒が各種行政機構に送った書信や当時の新聞記事などがある。これらの史料はデジタル化が進んでおり、これまで確認した史料の半分はデジタルファイルで閲覧した。一方、残りの半分は紙媒体で閲覧したというわけであるが、かなり紙の劣化が激しく文字が見えない部分が多く、またページを開く際に

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 1年間の現地調査は公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団の調査研究助成 (研究題目: 仏教とナショナリズム—20世紀ベトナムの仏教諸団体を例に) により実現した。2024年6月以来、ベトナム国家大学ホーチミン市校傘下の人文社会科学大学ベトナム学科 (*Khoa Việt Nam Học, Trường Đại Học Khoa Học Xã Hội và Nhân Văn, Đại Học Quốc Gia Thành Phố Hồ Chí Minh*) のもとで現地調査を行なっている。

は破れないよう細心の注意を払う必要がある。なお、作成言語でいうと、ベトナム語、フランス語、クメール語、英語の順に多かった。時代としては植民地だった1950年代以前に遡るとフランス語の文書が多くなり、また地域的にはメコンデルタで作成された文書だとクメール語が多くなる。フランス語とクメール語はまだ読むことができないが、この史料の重要性を感じているため、一旦複写をしておき、後日読解するつもりである。ちなみに、文書の種類により複写費が異なるが、基本的に1枚3,000ドン（約17円）で、学生だと半額になる。

一方、利用者を見ると、ベトナムはもちろん日本、韓国、アメリカ、カナダ、フランスなどの研究機関から研究者たちが訪れていることが分かる。ここでは大学院進学前に、相談ののってくださった韓国の先生と約6年ぶりに偶然再会したり、そこから知り合いの先生方と繋がり、ほかの研究者たちとグローバルな交流をもつこともできた。研究者たちがこの第二国立公文書館に集まっているということは、ここに所蔵されている史料の価値がそれだけ高いということを証明している。また、ここでの出会いを通じて自分の研究をアピールしたり、最新研究動向を探ることもできるため、当館は単なる史料収集の場にとどまらず、情報交流の場といってもよいだろう。

人文社会科学大学図書館 (Thư Viện Đại Học Khoa Học Xã Hội và Nhân Văn)

人文社会科学大学図書館は、ベトナム国家

大学ホーチミン市校傘下の人文社会科学大学の図書館であり、1区キャンパス (Cơ sở Quận 1) とトゥドゥック市キャンパス (Cơ sở Thành phố Thủ Đức) にそれぞれ1カ所ずつある。私が利用している1区キャンパスの図書館のほうが所蔵数が少し多く、第二国立公文書館から徒歩で僅か5分の距離に位置している。

1区キャンパスの図書館の閲覧室 (写真1) に入ると、学習空間と書架がある。書架の本を閲覧するには学生証が必要だが、私の場合、学生証の代わりに研究に関する人文社会科学大学総長の捺印済の書類を提示することで閲覧することができた。ただ残念ながら、貸出はできないということであった。

ここで探している文献は、仏教史に関する学術書である。仏教史研究において欠かせない、故ティック・ナット・ハン師 (Thích Nhất Hạnh)²⁾ の『ベトナム仏教史論 (Việt Nam Phật Giáo Sử Luận)』は幾度か再版さ



写真1 人文社会科学大学図書館の閲覧室の入口 (1区キャンパス)

れ、どの書店でも販売されているが、このような特殊なケースを除くと、ベトナムでは仏教史に関する学術書を入手することはかなり困難である。

したがって、このような学術書に関しては人文社会科学大学図書館を頼りにしている。その名のとおり、人文社会科学に関する書籍がたくさん所蔵されており、書架いっぱいにも所蔵された学術書を見ると、ワクワクしながらも果たして読み切れるかと圧倒されてしまうほどである。また、ここでは人文社会科学大学の博士論文も閲覧できる。同大学には宗教学博士課程がないため、宗教学の棚には宗教に関するベトナム学や哲学の博士論文が置かれている。博士論文からは新人研究者の研究動向を窺うことができるため、じっくり読みたいと思う。

フエクワン図書館 (*Thư Viện Huệ Quang*)

南部訛りが強い場合「ウーイワン」とも聞こえるフエクワン図書館は、ホーチミン市の中心部から離れたタンフー区 (*Quận Tân Phú*) に位置する。仏教系図書館である当図書館は図書館運営以外にも、「昔の跡を保存しよう、昔の資産を発揮しよう (*Gìn Giữ Nét Xưa - Phát Huy Vốn Cũ*)」というスローガンのもと、古い文献のデジタル化・影印・復元に力を置いているという [Lê Thị Ngọc Hà 2020: 83]。

閲覧室 (写真2) で本を読んでいると、僧尼たちが漢文を勉強している姿が目に入る。



写真2 フエクワン図書館の閲覧室

図書館の関係者たちと話した際には、私が漢文を読めるかどうかに興味をもっているようであった。だが、残念ながら、私は漢文読解を大学生時代に習ったが、現在はほとんど忘れてしまい、当図書館では古い漢文 (漢喃) 史料ではなく20世紀出版の書籍、特に1975年以前の仏教書籍を探っている。

フエクワン図書館は1975年以前の仏教書籍を影印版として再版し、それを販売している。1975年というのは南部が解放された年で、ベトナムでは政治史と同じく仏教史においても歴史の転換点として認識されている。1975年以前の仏教書籍は、仏教徒が自己主張を宣伝するためのメディアだったため、当時の思想が読み取れる貴重な史料である。そのなかには、反共主義など現政権からみれば不適切な内容も含まれているが、その内容の割合が少ないためか、それほど問題視されないのかもしれない。とにかく、内容を修正せずにありのまま再版しているということは、

2) 1926年生、2022年没。筆名はグエン・ラン (*Nguyễn Lang*)。社会参加仏教の提唱者として世界的に名高い僧侶である。今なおベトナムでは彼の多数の著作が人気である。

当時の歴史を探求する者として非常に有難いことである。

古本屋通り

ホーチミン市で有名な古本屋通りは5区 (Quận 5) のチャンニャントン通り (Đường Trần Nhân Tôn) と、フーニャン区 (Quận Phú Nhuận) のチャンフーイリーウ通り (Đường Trần Huy Liệu) にある。各通りには古本屋が数軒並んでおり、店舗に入ると書架に古本が秩序なくいっぱい詰められている様子が目に入る (写真3)。しかし、秩序がないのではなく店主なりの秩序があるようで、「仏教書籍を探しに来ました」と訊くと仏教書籍欄がどこか教えてくれる。優しい店主の場合は、希望にかなう書籍が見つかるま



写真3 某古本屋の書架

で一緒に探してくれる。

一部の古本屋はホームページも運営しており、ネットでも古本のリストを確認することができる。しかし、事前に確認した情報だけでは足りないのが常である。古本屋通りでは自分の足で歩き回り、頑張って書架をくまなく探すと、欲しかった本が見つかるし、また予想外な良書を発見できるかもしれない。

値段はそれほど安くない。たとえば、フエクワン図書館の影印版が18万ドン (約1,058円) だとすると、その底本は100万ドン (約5,882円) 前後である。しかし、ほこりが溜まりに溜まって、開いた途端のどがかゆくなるほどのその古さと、底本がもつ希少性を考えるとそれほど高いとは思わない。

私にとって異国の地での文献探しは、決して楽とはいえないが、未知の世界へ足を踏み入れることのできる楽しい冒険でもある。エアコンの利かない、蒸し暑くほこりっぽい空間のなかで、長時間粘った末、良い文献に出会えたときの喜びはひとしおである。自分の研究にぴったりと合致する文献が見つかったときの感動が待ち受けているからこそ、一筋縄ではいかなくとも、やめることができないのが、文献探しの旅だといえよう。

引用文献

Lê Thị Ngọc Hà. 2020. Thư viện Huệ Quang, TP. Hồ Chí Minh [ホーチミン市のフエクワン図書館], *Tạp Chí Văn Hóa Phật Giáo* số 358: 82-87.

試合に行こう！

—タタに乗って—

高橋明穂*

久しぶりの村

2024年、2度目のセネガル渡航となり、久しぶりに村入りする当日。前回の渡航から約9ヵ月たっていて、言葉を忘れてしまっていた私は、村の人々が私のことを覚えているのか、また以前と同じように迎えてくれるのか、彼らとコミュニケーションを取れるのかなどたくさん不安を抱えていた。首都ダカールから、ダカールデムディックという高速バスで村近くの地方都市まで向かい、そのあとタクシーを捕まえて村まで行く。タクシーはすんなり捕まったが、値段交渉がうまくいかず、通常の2倍の価格で村まで行くことになってしまった。乾季が始まったと思ったのに当日の朝に雨が降ったのか、村に近づくにつれ道はぬかるむ。この先の村での生活がどうなるのだろうかと思いがやられてきた。

家の前につき、タクシーから荷物を降ろしていると、ステイ先の家族や友人、近所の人たちが集まってきて、口々に

「いつ来たんだ？」

「元気だったか？」

「会いたかったよ」

「お土産はどこだ？」

など思い思いのことを話しかけてくれた。たくさんの方が入れ代わり立ち代わりで話してくれる中、小さな女の子が走って私に飛びついてきた。いつも一緒にいた妹だ！

彼女は私の手を引きながら、お父さんのところに私を連れて行った。

お父さんは私の顔を見ると

「わたしの子だ！帰ってきたね！みんな待っていたよ！」

と言って、荷物を置く場所や用意した部屋を案内してくれた。お客さんが来ていたので、お父さんはすぐに部屋から出て行ったが、それと入れ替わりに妹たちが部屋に入ってきた。彼女たちは、私の荷物を眺めたり、動かしたりしたあと、ベッドに座っておしゃべりを始めた。長旅と久しぶりの村入りで少し疲れていた私は、そのおしゃべりに少し耳を傾けながら、知っている単語を拾っては何の話をしているのか考えていた。しかし集中力が途切れてきてだんだん声も遠くなって、眠りにつこうとしていた時だった。

「アミナ、ジーンズ持っている？こういう青いやつ」

と、話しかけられた。ジーンズは持ってないけれど、青いズボンを持っていると答えると、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

「じゃあそのズボンを着て、このユニフォームも貸すから着てね！わかったね！」
 と言って、さっさとみんな部屋を出て行ってしまった。何が起きているのかよくわからないものの、言われたとおりに青いズボンと6と書いてあるサッカーユニフォームを着て、外に出る。部屋の外には、私と同じように青で着飾った10代の女の子たちが集まっていた。みんなでどこかに行くようだ。慌てて外に行く用のポシュットを用意して、みんなのもとに向かう。私が来たことに気が付いた妹がこう言った。

「ニュデムマツチュバ！」(試合に行くよ！)

試合に向かう

みんなでおしゃべりしながら、家から少し離れた日陰に行く。そこには、もうすでに8人ぐらいの若者が同じような服を着ておしゃべりをしていた。そこで話しているのが、村の男の子たちが所属しているサッカーチームが村内の他のチームと戦うのを、隣町まで応援に行くそうだ。そのチームには、私がお世話になっている家の兄弟、村の友だちも所属している。

セネガルのサッカー熱はとてすごい。夜には、テレビがある家や商店で子どもから大人までサッカー観戦をし、大きな声をあげながら皆で一喜一憂する。大きな大会や試合があると WhatsApp のステータスには、応援しているチームのことや、そのチームのユニフォームに自分の名前を書き込んだものを共有して、サッカー一色になる。小学生ぐらいの男の子たちが、夕方に浜でボールを追いか

けたり、サッカーチームに所属して練習にいそしんだり、試合を家族総出で応援に行くことも珍しくない。

10分ほど待っていると、エンジンの音が近づいてきた。みんなが歓声をあげ、タタと呼ばれるマイクロバスの到着を喜ぶ。この車で試合会場まで向かう。音を聞きつけたのか、先ほどよりも多くの子どもたちが車を囲っている。1人500cfa(約125円)を払って、急いでタタに乗り込む。一番初めに乗り込んだのは、年齢が少し上のお姉さんグループ、その次に男の子たち、明らかに乗車定員を超しているタタに、「もっと詰めて！」といって、残り子どもたちが乗り込んだ。すし詰め状態になったタタは、私たちを乗せて試合会場へと向かう。出発してすぐ、15歳ぐらいの男の子が、ペットボトルに紙と水を入れたものを、子どもたちにかけて始めた。かけられた子どもたちは、その水を体に塗り始める。何をしているのだろうと見ていると、私の順番がきた。隣に座っていた妹が笑顔でうなずく。それを合図に、彼は私にその水をかけて、体に塗るように促す。塗りながらこれは何かと聞くと、プロテージュ(保護するもの)だという。彼の話によると、相手方のチームが、マラブー(呪術師)に頼んで私たちが応援に来られないように、そして選手がうまくプレーできないようにまじないをかけたのだ。そして、こちら側のチームもそのまじないをかわすべく他のマラブーのもとに行き、そのまじないから身を守るように、そして良いことがあるようにと、この水をもってきたのだという。タタに乗った全員が

この水を体に塗り終わると、今度は応援歌が始まった。せーので歌が始まったわけではない。誰かが手拍子を始め、それに合わせて誰かがより細かなリズムを刻む。さらにそれに乗るように誰かが歌い始め、だんだん声が大きくなり、タタが大きなスピーカーになったかのような一体感を持ち始める。みんな座って歌うだけではなく、立ち上がったたり、体を揺らしあったり、甲高い声をあげたり、窓から体を乗り出し道行く人に手を振ったり。とにかく大きな声で、全身で音を鳴らしながら試合会場へと向かった。これから始まる試合へと、応援する私たちの熱気も高まっていた。

試合が始まった

試合会場に着いて、すぐに観戦できるわけではない。まず500cfaをまとめ役の子に渡して、入場用のチケットを購入してもらう。そのあとに、警察による持ち物検査がある。ライターや香水などの引火しそうなものや、ナイフなど危険性が高いと思われるものは取り上げられる。その検査を通り抜けると観戦席にたどり着ける。地方の10代の少年たちのサッカーの試合に警察が出動し、持ち物検査までしているのには正直驚いた。

観戦席に着くと、選手たちがウォーミングアップをしているのが見えた。目の前を青のユニフォームを着た選手が走ると歓声をあげ、緑色のユニフォームを着た相手方の選手が走るとヤジを飛ばしている。相手方の応援も同じで、彼らはジャンベという太鼓を鳴らし負けじと応援とヤジを飛ばしていた。燃え

上がる観客たちの間を、ビニール袋にジュースやヨーグルトを入れ凍らせて作ったアイスを売る人や、袋に入った冷たい水を売る人がゆっくりと歩いて行く。ずっとこの熱気が続くのかと思ったら、そうではなかった。選手たちが輪を作り、試合が始まるとわかると、みな息をのみ、じっとグラウンドを見つめた。いったん試合が始まってしまえば、タタの中と同じようにお祭り騒ぎだった。たくさん歌を歌い、踊り、選手たちのプレーに一喜一憂しながら応援した。熱い中、しかも必死に歌い踊る。私ももちろんそうだったが、試合が後半になるにつれ、座りだす子どもたちもいた。いったん座り込み、隣にいる人とおしゃべりしたり、他のことに気を取られているように見えても、試合の動向にはしっかりと気を配り、試合の重要シーンではみんなと同じように食い入るように見つめる。ゴールが決まらなくても、全力で決めようとしたことをほめたたえる。結局、私たちのチームは、2-0で勝利を収めることができた。

家に帰ろう

試合が終わり、警察や選手も帰って、観客がタタに乗って帰ろうとしていた時のことだった(写真1)。少年2人が急に殴り合いの喧嘩をし始めたのだ。その喧嘩は徐々にエスカレートし、いたるところで小さな喧嘩が勃発し始めた。あとでわかったことだが、試合の結果に怒った子どもが相手方の子どもにけんかを吹っ掛け、それが殴り合いになってしまったのだ。その喧嘩を収めようと、体の大きい青年たちが子どもたちを引き離すも、



写真1 サッカーの試合後、村へ帰るタタ（マイクロバス）を待つ子どもたち

一度火がついてしまうと、他のところに引火しやすくなかなか収まらない。その喧嘩に私の妹たちも巻き込まれ、顔をぶたれた子や、石を投げられた子もいた。帰宅後、子どもたちは試合の内容よりも、試合後の喧嘩について大人に聞かせていた。大人たちはその後3日間ほどその話題で持ちきりだった。大人たちは普段から政治や経済について、たくさん議論をしている。彼らは、子どもたちの喧嘩についても重要なこととして議論していた。村が2つの地区に分けられ、それぞれがサッ

カーチームをもつ。その2チームが競争することで、少年たちは試合後の日常においても相手地区を敵とみなす。しかしこれは、小さなひとつの村の平和、ウォロフ語でいう「ジャム」を乱しかねない。警察による身体チェックがあったことから、大人たちはこのような混乱を予想していたのだろう。村を二分したチーム構成の少年サッカーが村に占める位置をもう少し考えてみたい。

喧嘩を逃れ、無事にタタに乗って帰る途中、行きしなと同様にみんなで大きな声で勝利の歌を歌っていた。タタの運転手も、勝利のファンファーレのようにクラクションを歌に合わせてならし、村中に勝利を知らせていた。ただの少年サッカーの応援ではない。観客も選手も、真剣で全力をかけて応援する。そこにいた私が誰であるのかなど関係なく、とにかくみんな全力で応援する。帰村初日にあの歌やクラクションのファンファーレに包まれ、みんなと一緒に頑張って応援したことで、当初の不安はどこかへ吹き飛んでしまった。

生活に根ざしたもののづくり

—ピーナッツとココナッツの果肉を砕いた先に—

畔 柳 理*

あふれる輸入量産品

アフリカの都市の幹線道路を歩いていると、実にさまざまなものが販売されている様子を目にする。食料、飲料、調理器具、プラスチック製の食器やバケツをはじめ、日用雑貨など、日々の生活に関係するものはもちろんのこと、小さなものでは、コードがつかない電源プラグや電球のソケット、工具やネジ、一見しただけでは何に使うのかわからない配線に至るまで、多種多様なものが安価に、そして大量に販売されている。

筆者の調査対象国であるモザンビークでは、上記のうち、鮮度が重要な生鮮食品や地域の人々の好みが大きく影響する加工食品、飲料品などについては、現地での生産が進められている。しかし、プラスチック製品や金属製品を筆頭に、多くの工業製品は中国やインド、隣国である南アフリカなどの工業大国で大量に生産されたものが輸入され、販売されている。

一般的に、プラスチック製品や小型の金属製品の製造には、鋼鉄製の金型が用いられており、型の形を材料に転写することで、同じ形の製品が効率よく大量に生産されている。たい焼きの型などを想像すると理解しやす

い。プラスチック製品の場合は、樹脂材料を熱で液状に溶かし（可塑化させ）、金型の中に流し込み、金型の中で冷却する。樹脂が十分に冷却され、硬化した段階で、金型を開くと、型どおりに成型された製品が出来上がる。この作業を繰り返すことにより、同じ形の製品を大量に生産することができる。

金属製品においても、一般的に、成型する金属よりも硬度が高い鋼鉄で製造された金型が用いられる。金属の材料を金型の間に挟み、金属の材料を打ち抜く、曲げる、もしくは段階的に延ばす（絞る）ことで、金型の形を転写し、成型していく。アルミや銅などの融点が低い金属が原料となる場合、樹脂と同様に、金属を熱で溶かし型に流し込んで成型する方法もあるが、小型の製品の場合は、打ち抜きや曲げ、絞りによって生産されることが多い。電球のソケットなど、複数の部品が組み合わせられてきた製品の場合は、部品の製造後に組み立ての作業工程が設けられる。

これらの製品は、金型の他にも、金型を固定して、材料に変形するエネルギーを加えるための生産設備が必要となる。プラスチック製品の場合は樹脂に熱を加え、金型に樹脂を流し込むための射出成型機が、金属製品の場

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

合は、金属の材料を型で挟み込み、圧を加えるためのプレス機が必要となる。

これらの設備を安定的に、長期間稼働させるためには、生産設備を地面に固定して据え付けるための工事も必要となる。金型についても、鋼材の調達から加工まで、決して安価にはできず、その製造には、加工の精度が高い設備や関連する知識・技能が求められる。設備及び金型の保守点検に関する維持費も必要となる。一旦製品の生産を開始すると、生産の停止や変更にも多大な労力と費用を要するため、大量生産の実現にあたっては、投資を回収できる販売量の見通しが立って初めて初期投資をすることができる。

モザンビークでこれらの条件を満たすのは容易ではない。インドや中国のように、大規模な生産設備を製造できる能力を有しており、国内で安価な材料及び労働力を大量に調達できる体制が整備され、かつ国内にも大きな市場がある国と比較すると、輸送コストを差し引いたとしても、モザンビークの企業が価格面で競争するのは難しい。上述した食品



写真1 幹線道路沿いでは多様なものが販売されている

や飲料品以外では、モザンビークではどのようなものであれば対抗できるのだろうか。

現地で生産される非量産品

幹線道路沿いには、先述した小さな工業製品の他にも、大きな製品も販売されている。たとえば、木製のタンスやテーブル、ソファなどの家具、鉄製の窓枠や門扉などの建具がある。家具や建具などは、展示される商品見本のすぐ脇にある、簡易な小屋ないしあずまやのような場所で、時には屋根すらない路上で、モザンビークの人々によって生産されている。

まず、確認すべきなのは、家具や建具などの製品は、寸法やデザインが型どおりに決まっているわけではなく、完成品の形が消費者のこだわりが大きく左右されるという点である。モザンビーク都市部の平均的な所得の人々にとって、家具や建具は高価で、何度も買い替えることができないため、消費者は寸法やデザインにこだわりをもつ。

このような特徴を有する製品を、モザンビークの人々はどのようにして生産しているのだろうか。筆者は、このうち、鉄製の建具などを製造する鉄工所（ポルトガル語：Serralharia）と呼ばれる零細企業を対象に、製品の生産方法や、生産に利用する機械などに関する聞き取りや観察調査を重ねてきた。

各企業に共通するのは、先述した量産品とは異なった生産方法を採用しているという点であった。鉄工所では、量産品とは異なり、注文を請けて初めて生産を開始する、受注生産方式を採用していた。また、鉄工所の職人たち



写真2 鉄工所での窓枠生産の様子

は、ほとんどの製品を、ディスクグラインダーと呼ばれる研磨や切断ができる持ち運び式の機械と溶接機の2種類のみで生産していた。溶接機に関しては、数ある溶接機の種類の中でも、作業環境における制約が最も少ない被覆アーク溶接機が利用されていた。

生産工程は完全に画一化されているわけではなく、時々で工程の順番が変わることがあった。また、鉄工所の主要生産品目は建具ではあるものの、建具の他にも、コンロや台車、ベッドなど、多様な製品を生産しており、自動車の修理を請け負うこともあった。

汎用的な設備や機械

製造業には、生産する製品の種類や特徴、生産量に応じて、多様な生産方式が存在する。代表的な例では、工程を細分化すると同時に工程間に連続性をもたせ、特定の製品を大量に生産する方式と、大量生産には不向きだが、安価で基本的な技術を用いた設備（汎用設備）を利用し、多様な製品を生産する方式の2種類が挙げられる。

前者の場合、たとえば、金型や成型機・プレス機の導入などに費用が発生するものの、機械が生産を担うため、人が介入する余地が少なく、労働コストを削減することができる。一方で、生産品目を変更する場合、工程の見直しや設備の入れ替えなど、多大なコストが発生する。そのため、生産品目の変更は容易ではない。

後者の場合、人が作業を担うため、生産量が増加すれば、労働コストが増加する。他方で、用いる設備（機械）は基本的な技術のみを搭載したものが多く、熟練の作業であれば、設備（機械）などを入れ替えることなくさまざまな製品を作ることができるため、生産品目の変更が容易となる。

鉄工所の例でいうと、グラインダーと溶接機が、使う人間の技能や使い方次第で多様な製品を作ることができる汎用設備（機械）として用いられる。つまり、寸法やデザインが多岐にわたる家具や建具などは、ひとつの物を大量に作ることでできる専用設備よりも、多様なものを作る汎用設備（機械）を用いる方が、顧客の需要に柔軟に 대응できるであろう。

多様化する需要に応じて、近年、いくつかの鉄工所は、従来と異なる領域の製品を生産するようになった。モザンビークでは、砕いたピーナッツやコブラ（ココナッツの果肉）を利用した料理が多いのだが、2020年頃からピーナッツやコブラを粉砕する機械が販売されるようになり、これらの機械を用いてピーナッツやコブラを粉砕する商店が増加している。鉄工所の中にも、需要の変化に反応



写真3 ピーナッツを粉碎する機械

し、建具の注文がない時期に、上記の機械の材料部品を購入して生産する企業がみられるようになった。このような生産品目の柔軟な変更を可能にしているのも、これらの企業が保有する汎用設備（機械）と職人の一定水準以上の技能であるといえる。

生活に根差したものづくりの先に

モザンビークでは、製造業を基盤とした産業構造への転換が経済上の課題に挙げられている。筆者が滞在した現地の大学に通う学生や地域住民から、日本はどのようにして工業大国になったのかを尋ねられることもある。彼らは自動車や電子機器の量産工場がモザンビークに設立されることを夢見ている場合が多い。

報道などで日本の製造業の衰退が嘆かれて久しいが、日本が依然として国際的な競争力をもつ産業のひとつに、工作機械産業がある。工作機械は生産現場以外で見る機会が限

られているため、世間からは目立たないが、金属の材料からさまざまな形状の部品を加工して生産することができる。先述した、金型や、生産設備の部品なども工作機械で製造される。部品を組み合わせたものが機械となるため、部品を製造する工作機械は「機械を作る機械」や「マザーマシン」とも呼ばれる。日本の工作機械メーカーは、長年にわたり、ミクロンレベルで工作機械の加工精度を高めるための技術を培ってきた。工作機械産業はいわば工業国としての象徴である。

では、日本の工作機械メーカーは最初から高性能な工作機械を作ろうとしていたのかというと、必ずしもそうではない。国内三大メーカーに数えられ、愛知県に本社を置くオークマは、愛知で親しまれるきしめんやうどんの製麺機を製造していた。同じく三大メーカーのヤマザキマザックは量産製造機を生産していた。どちらのメーカーも、操業当初は人々の生活に根差した製品を製造していた。

モザンビークの産業構造の転換にあたっては、確かに、自動車や電子機器の量産工場の設立も目指すべき未来ではあるが、汎用設備（機械）を用いて、地域の需要に応えながらさまざまな製品を生産している鉄工所の事例に鑑みると、ピーナッツやコプラを粉碎する機械を生産する企業から、「機械を作る機械」を生産する企業が出現する未来があっても良い。地域の生活に根差したものづくりを基盤とする工業国への歩みがあっても良いのではなかろうか。

事件は現場で起きている

—ルサカ周縁の未計画居住区における飲料水汚染—

高橋 侃 凱*

ザンビア共和国（以下、ザンビア）の首都ルサカの周縁部には、中心部からたかだか数km程度の地域に未計画居住区が広がっている。所狭しと家が立ち並ぶ未計画居住区では、未舗装でボコボコの道がまるで迷路のように入り組んでおり、至るところにごみが散乱している。ごみや汚水で満ちている側溝は深いにもかかわらず蓋がなく、とても危険である。周辺でごみを燃やしているせいで、いかにも健康に影響を与えそうな臭いがあたりに充満している。ルサカの南西部に位置するチャワマ地区もそのような未計画居住区のひとつであり、このチャワマ地区こそがわたしの調査地である。わたしはこの地区で、水と衛生について、特に飲料水の質に焦点を当て、2度にわたる調査（2023年9月～11月、および2024年7月～10月）を行なった。

チャワマ地区において、大半の住民は家の中に給水栓をもたない。したがって住民たちは、屋外の給水栓から水を得て、利用することになる。給水栓は、コミュニナルタップとプライベートタップという2種類に大別される。前者は、その周辺に住む20世帯ほどで共用されていたのに対して、後者は、ひとつのコンパウンド内に住む数世帯でのみ利用

されていた。住民は、複数のバケツを各々で用意し、給水栓で水を満たし自宅へ運んでいた。バケツの容量は20Lのものが多く、水で満たされたバケツを何個も運ぶのはなかなかの労働である。飲料水として、あるいは料理のため、洗濯のため、掃除のため等々、生活のあらゆる場面で水は不可欠である。その日に使う水を汲むために、早いところでは、朝の6時台から給水栓に多くの人が並んでいた。

給水栓には供給源が3つある。地区外の給水施設Aと地区内のB、Cである。Aは約50km南方に位置するカフエ川を水源としており、ルサカ市全体に広く水を供給して



写真1 給水栓での水汲みの様子

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

いる。一方、B、Cはいずれも地下水を水源としており、主にチャワマ地区のみに水を供給している。中でも、チャワマ地区の大部分に水を供給しているBは、水源として、異なる3つのボアホールと呼ばれる井戸を利用している。Bでは、近くのボアホールと、少し離れた2つのボアホールから来た水が合流し、そこに塩素が加えられることで消毒処理が施される。Bは電力の問題がない限り、24時間水を供給できている。Bは近くにある病院と電力系統が同じであるおかげで、基本的に電力供給が止まることはない。ただ、離れた2つのボアホールは別の電力系統であり、電力の供給が止まることもある。ここへの電力供給が止まってしまうと、水を汲み上げることができず、B自体の水供給が止まってしまうこともあるようだ。2024年の調査期間中は、前年度の雨季の異常な降水量の少なさゆえ、十分に水力発電ができず、電力不足が著しかった。わたしが住んでいた地域は、調査地から7kmほど離れたルサカ市内であったが、8月までは計画停電で半日は電気が使える状態から、9月以降1日のうち3時間しか電気が使えないという日々が続いた。実際、病院と電力系統の異なるCは、調査期間中ほとんど稼働していなかった。

給水施設Bにはひとりの職員がいて、施設の管理をしていた。基本的に朝7時に来て17時30分に帰る。朝施設に着いたら、塩素消毒のためのバルブを開けて水に塩素を加え、帰るときにバルブを閉める。電力が供給されてさえいれば、水は24時間供給され



写真2 塩素注入のための設備

続けている。わたしは不思議に思って、「なぜ塩素を24時間加え続けないのか？」と職員に尋ねた。「施設の周りの塀が壊れていて暗い時間は職員の安全を担保できないから、今は明るい時間しか職員がいない」と答えた。職員のいられる時間だけ塩素を加えているらしい。2024年の1月からそういう状況が続いているとのことだった。

ある日、さまざまな地点での給水栓の水の遊離残留塩素濃度を測定したところ、場所によって大きくその値が異なっていた。基準値を大きく超えるものもあれば、全く検出されないものも多くあった。さらに、同じ給水栓の遊離残留塩素濃度を複数日にわたって調べたところ、複数の給水栓で、その濃度が大きく変動していた。さらに、複数の水サンプルから多量の大腸菌が検出された。大腸菌の検出は、糞便に汚染されていることを強く示唆するので、供給された飲料水が糞便由来の病原性微生物の曝露要因となりうることを示している。これらの給水栓は、ルサカ水衛生公社（以下、LWSC）による消毒処理を受けた

水が管路を通じて給水された、国連の基準でいう“改善された”水源である。ただ、本当に“改善された”水源といえるのだろうか。水質が常に担保されているわけではないこと、また同じ地区内にもかかわらず、場所によって水質に格差があることなどから、“改善された”水源というにはほど遠いと思った。

調査期間中は電力不足がひどく、その結果水供給も停止し、水の出ない給水栓が多くあった。間欠給水は、供給される水の水質劣化の大きな要因となっている可能性がある。実際、間欠給水が水道管内での水質劣化に与える影響を論じている研究が存在する [Kumpel and Nelson 2013]。供給される過程で、水が管内で汚染されている可能性は否めない。

2023年の11月に、わたしの調査に協力してくれた、地区内に居住するR氏がプライベートタップを新設するというので、偶然その工事の現場に立ち会えたことがあった。住民が新たにプライベートタップを作るには、まずLWSCの事務所に行き、お金を支払って、許可をもらう必要がある。その後、住民は何日もかけて、自ら敷設のための工事を進めることになる。大通りに沿って埋まっている太いセメント製の水道管に穴を開け、そこに新たな管を接合し、水を引く。

水道管を掘り起こすためにR氏の身内の若者たちが鍬でせっせと土を掘っていた。大人の男性がすっぽり入ってしまうくらいの深さの穴を掘ると、セメント管が露わになった。また、プライベートタップにつなげるための新たな管を埋める用の溝も掘らなければ

ならない。セメント管が埋まっている場所からR氏の自宅近くまで100mを超える長さの溝を数人で延々と掘っていた。溝を掘り終えたある日、LWSCで昔働いていたという配管工が来て工事を始めた。大きな釘のようなもので、セメント管にガンガンと穴を開けていった。手慣れた手つきで、どんどん作業を進めていき、新たな管の接合を終えた。ただ、管同士の接合は不十分で、傍から見て容易に漏水が確認できるほどであった。何度か微調整をしていたものの、結局漏水が止まらぬまま管を土に埋めてしまった。

LWSC自身がこの工事を直接行なえるほど手が回っていないからこそ、住民たちに工事をゆだねている。プライベートタップの数は年々増えており、いろいろな場所でこのような工事が行なわれているのだろう。必ずしもこうした状況が水の供給過程における唯一の汚染要因だと断定することはできないものの、その可能性のひとつであることは否めない。

ここまで、給水栓に水が届くまでの実情を記してきた。しかし、さらに深刻な問題はその後で起きている。住民たちは、バケツに水を貯めて利用している。貯留水の大腸菌濃度の時間変化を調査したところ、複数のサンプルで、給水栓の水に比べてその濃度が大きく上昇していた。文字どおりけた違いに増加していた。取水直後の水であっても大腸菌濃度が大幅に増加しているものがあり、これはバケツ自体が汚染されていることによると考えられる。また、時間経過とともに汚染が進んでいるものもあり、その原因のひとつとしては、汚染されたコップなどを用いてバケツか



写真3 新しく接合された管の様子
管の下のほうに漏れた水が溜まっている様子が見てとれる。

ら水を汲んだことがあげられる。仮に“改善された”水源から安全な水を得られたとしても実際の利用時に水が汚染されていることは大問題である。

ザンビアでは、メイズというトウモロコシの粉をお湯で練って作った“シマ”が主食となっている。このシマは乾燥するとなかなかはがすのが大変である。食べた後の鍋にこびりついたシマを取って洗うために、多くの住民たちは、スポンジとともに地面の砂を研磨剤として使っていた。このような行動が関係しているのだろうか、スポンジから高濃度の大腸菌が検出された。一口に“スポンジ”といっても、日本で使われるようないわゆるス

ポンジから、ほろほろの布切れのような何かを洗うには心もとないようなものに至るまで、さまざまなものがあった。いずれにせよ、衛生用品が逆にモノを不衛生にしている可能性があることは注目すべきである。どれだけきれいにしようと試みても、そのための道具が汚染されていると、綺麗になるものも綺麗にならない。スポンジがバケツや食器、さらには貯留水の汚染要因となっていることが強く疑われる。スポンジ自体の汚染要因や、衛生用品であるスポンジが病原性微生物の繁殖場となっている可能性、そしてスポンジからの伝播を探るために、今後さらなる調査をしたいと思う。

チャワマ地区では、毎年のようにコレラが発生し大きな問題となっている。水を通じた病原性微生物の曝露は、そうした感染症の大きな要因である。水は、給水施設を出て、管内を通り、給水栓を経て、実際に人々が利用する過程で、さまざまな経路を通じて糞便に汚染されている。ひとつの経路を特定し、それを封じることができたとしても、必ずしも問題解決につながるとは限らないのが難しいところである。気の遠くなることであるが、落穂ひろいのように、地道に追究し続けるしかないだろう。

引用文献

- Kumpel, E. and K. L. Nelson. 2013. Comparing Microbial Water Quality in an Intermittent and Continuous Piped Water Supply, *Water Research* 47(14): 5176–5188.

研究と現実

—パラオでのフィールドワークの旅路—

岡野美桜*

フィールドワークの記憶

最後にパラオでフィールドワークを行なったのは昨夏から秋のことである。時間も経ってしまい、こぼれ落ちた記憶の方が多い。そして、ポジティブな情報よりもネガティブな方が必要であると判断する脳の仕組みゆえかもしれないが、大変だったことを多く覚えている。

パラオで調査をしてきたと言うと、ほぼ必ず「パラオはどうだった？」と聞かれるので、そのたびに「楽しかったよ、海が綺麗だった」ととりあえずの返事をしている。楽しい思いをさせてもらったのも、海が綺麗で印象に残っているのももちろん事実であるが、実際にはそのような一言に収まる日々ではなかった。よそ者である私が、そこで出会った実にさまざまな人々に助けられお世話になりながら、なんとか過ごした3ヵ月間であった。そのため、都合の良い部分だけ切り取ってあたかも充実した時間を過ごして成果を得たといった記述をすることには抵抗がある。そこで、あえて大変だったことから書き始める。

パラオでの予測不能な日々

パラオは太平洋にある面積459平方キロメートルほど、人口約1万8,000で、386もの島で構成される国である。多くの人々は都市で公務員などとして働いたり、村で農業を営んだりしている。ダイビングなどの観光目的で日本から訪れる人も少なくない。

同国での滞在の始まりは、予想がつかないことばかりであった。首都はマルキョクにあるが、商業・行政・教育などの都市機能はコロールにある。そこでまず、コロールで長期滞在するための宿泊場所を探すことになった。物価の高い同国において長期滞在向いたホテルはなく、そしていわゆる不動産屋もない。そのためカウンターパートである地域短期大学の方からの紹介を受けて、空き部屋を探し、オーナーに交渉しに行くしかなかった。つまり、日本で家を探すときのようにあらかじめ選択肢があって、そこから条件で絞っていくような段取りではなく、あちこちを回り、口コミでたどり着いた貴重な物件に決めることになった。

1年を通して平均28℃前後と気温の高いパラオでは、学校や店に入るとエアコンが効いていて寒いくらいであるが、それは電気代

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を施設が負担しているからできることである。電気代が高いため、かならずしも家にエアコンがあるわけではなく、あったとしても長時間つけているわけにはいかない。私もその例外ではなく、エアコンをつけるとデポジット制の電気がすぐなくなるので、寝る前には消していて、夜中に蒸し暑さで起きるのが定番であった。また水の確保も重要であった。日中は喉が渇くし、料理にも使うので、5Lの大きいペットボトルをスーパーで買って、いつもそれをぶら下げて帰り道を歩くのは一苦勞であった。

ここまで、衣食住で苦勞した話をしてしまったが、良いこともあった。まず服についてだが、パラオは常夏なのでTシャツにズボンという服装で過ごせる。日本だと四季の移ろいに伴い身だしなみも移行しないと行けないが、やらなくてよいなら衣替えをしないほうが便利であることはひとつの気づきであった。それから、パラオは食材の多くを輸入に頼っているため食べ物の選択肢も限られているが、それも良かった。私は食べるのが好きなので、いつも食べ過ぎになるほどの量と種類に手を伸ばしてしまうが、あとになってそれを後悔することもあった。むしろ選択肢が限られて判断回数が減ると、ストレスが少ないということに気がついた。

苦勞して出会った住まいが、海際にあったことはありがたかった(写真1)。そこでは潮の満ち引きが感じられるし、船をつけて家から直接釣りに出ることもできた。家にいても感じる潮風と眺める水平線は、心地を良くしてくれた。パラオにいて、ないものねだり



写真1 海際の家からみる眺め

の思考をしていたこともあったが、あるものを確認して過ごす心が軽くなった。

現地調査の実際

現地調査に行くというのは簡単だが、あらゆる場面において、大学側のサポートや渡航先で出会った人々の度重なる手助けがあってこそ成り立つものである。また、長期で渡航するというのは、研究の世界においてもなかなかできることではなく、学生ゆえの特権である。そのような貴重な機会であるが、不安を抱えながらの調査もしばしばある。旅行とは訳が違い、すでに書いたように段取りが整っていることは少ない。たとえば移動についてである。パラオには電車やバスなど、公共交通機関がない。移動手段といえば、徒歩か自家用車かの2択といっても過言ではな

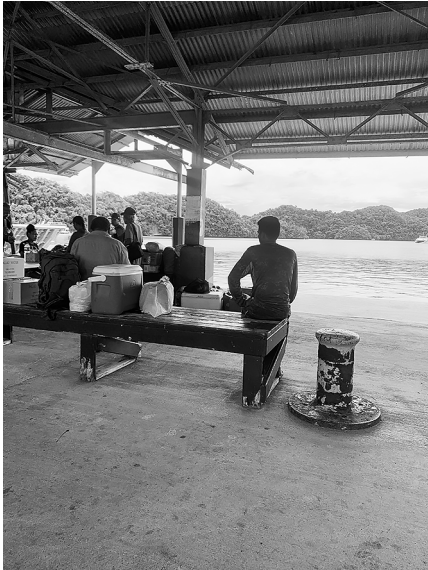


写真2 定期船乗り場で待つ人々



写真3 ボートで移動中の景色

い。最近、観光客用のバスが都市部を走るようになったと聞いたが、公共交通機関といえるのはせいぜいそれくらいであろう。政府が運航する離島への定期船はあるが、その運航スケジュールはまばらである（写真2）。乗ろうとしていた船はしばしば欠航し、次の便が1週間後だったこともある。出発日時も頻繁に変わるし、ようやく乗っても、1時間半と聞いていたところ4時間くらい波に揺られていたこともあった。このような交通事情であるから、陸地を移動しようとしたら、車を運転してくれる誰かを頼ることになるし、海を移動しようとしたら、船を出す誰かに便乗する形になる（写真3）。

また、用意してきた研究計画を実行するためには、準備が滞在期間の大半を占める。計画上はインタビューを行なうの一言に過ぎな

いが、実際には場所を探して、そこに私が訪問して大丈夫かを確認して、それから協力してくれる人を探して、その人が調査対象として妥当であるかを確認して、調査内容の説明をして相手から同意を得て、質問項目と進め方を再三確認して、ようやくインタビューを始められる。やると決めたことをやるだけなのに、それが結構難しいのである。日本にいてもある程度難しいであろうに、それを慣れない環境でやろうとするからさらに難しさを感じる。都市コロールだけでなく、同国北部のカヤンゲル環礁や、南部のアンガウル島（写真4）でも調査を行ない、そのたびに同じ苦勞をした。しかし、どの調査地を思い出しても、大変だった記憶と共に手伝ってくれた人の顔が浮かんでくる。

計画どおりにいかないことを楽しんでいる



写真4 アンガウル島にて

こともあるが、どうしようと狼狽していることの方が多かった。しかし、ここで気がついたことがある。不確定な未来に不安や心配を抱えて過ごすのも別に悪くないということである。うまくいかなかったときのことを心配しつつも、何かしらの情報を掴み、なんとかするという見込みで動き、やがて調査を完了するのである。そして、動いていれば助けてくれる人にも出会える。こうして、いつもと

違う場所で、思いどおりに進まないと感じつつも、やれることをなんとかやって日々を過ごした。

研究と実存の問い

このように、フィールドワークで直面する予想外の出来事や、そこで出会う人々との関わりの中で、自分が何をしているのか、何を目指しているのかという疑問が何度も浮かんだ。しかしながら、実存主義を代表する哲学者サルトルが「実存は本質に先立つ」と言っているように、ひとまず生まれて人間として存在している以上、あとは本質を形成していくのみである。今までやってきたように、やれそうなことを見つけて、なんとかこなし続けるというのもひとつの研究の在り方である。研究には終わりが無いという性質上、このようにどこかに向かって走り続けることが、私にとっての本質の形成である。進み続けることで、いつか本質と言えるようなものを身につけたい。

同じ地面を走り続けるだけでなく、違う土を踏むことで前に進めることもある。そうやってまたパラオに行こうとしている。

グジャラートで考えたこと

—保守的な空間の中で—

緑川 茉歩*

2024年9月27日、私はインド・グジャラート州の最大都市であるアーメダバードに降り立った。3週間ほどをカルナータカ州の快適な気候で過ごしていた私にとって、グジャラートはととても蒸し暑く、さらに土埃や排気ガスが喉を刺激するのが気になった。空港まで迎えに来てくれたUberの車はボロボロで、都心らしい場所に来てゴミと汚水が道端に溢れている。空港の近くにあった小型版「統一の像」の写真を添付しつつ、同期たちのグループラインに「おそらく調査地カルナータカになります」と愚痴をこぼすほどグジャラートで過ごすことに当初後ろ向きだった(写真1)。



写真1 小さな「統一の像」

保守的なグジャラート

グジャラートはインド北西部地域に位置し、産業も農業も比較的発展した州である。現首相であるナレンドラ・モーディーの出身地としても知られ、彼が14年間州知事を務めたことが州の発展に大きく貢献した。日系企業も進出するなど、経済発展が目されるグジャラートであるが同時に宗教的に保守的な地域でもある。

グジャラートはインドで唯一、現地インド

人が酒を購入することが法律で禁止されている州である。また、肉食主義者の割合も約40%と推定され、この比率は他の州と比較して突出している[応地2012:220]。2002年に起きたグジャラート暴動ではムスリムから2,000人以上の死者を出すなど、ヒンドゥー・ムスリム間の緊張感が他の州よりも高いことも特徴である[岡山2017:27]。

渡航前にこの暴動を取り扱ったドキュメン

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

タリーを見たことで、グジャラートは怖い場所なのではないかと私は緊張していた。この緊張感はグジャラートの人と実際に交流することで解消されていくのだが、同時に、人々の温和さの中にある保守的な姿勢や、若者の欧米的な価値観の高まりなど、多面的な世界に強い興味をもつようになっていく。

踊るナヴラトリー

私がグジャラートに滞在していた期間はヒンドゥー教のお祭りのひとつであるナヴラトリーの時期とちょうど被っていた。このお祭りは9日間続くものであり、夜になると人々は祭壇を中心にダンスを踊る。このダンスはガルバーと呼ばれ、動きは実にシンプルである。

アナンド市という中都市の家庭でお世話になっていた時、その家の娘さんがガルバーに行くとのことで1日だけ連れて行ってもらえることになった。しかし、彼女は22時を過ぎてもドレスの準備を始めない。「今日はダンスに行かないの?」と尋ねると、なんと夜0時を過ぎてから会場に向かうと言う。帰ってくるのは明け方4時近くで、彼女の送迎は父親の仕事だ。彼女はバイクで片道15分くらいのダンス会場に毎日通い、友だちとガルバーを踊り明かしている。このダンスは裸足で踊るため、彼女の足は地面にすれて真っ赤である。23時を過ぎたくらいによく化粧を始め、それが終わると素敵なドレスに着替える。彼女のお母さんが丁寧に三つ編みをしてあげるとちょうど深夜0時。これを9日間続けるのはなかなかの重労働

だ。特に両親にとって。

父親と彼女の真ん中に挟まれる形でバイクに乗せてもらい、アナンド市内の舗装が甘い道路に行く。お祭りのシーズンだからか深夜にしては車通りが激しい。綺麗にドレスアップした若者たちのバイクが急ぎ足で車の間を縫っていく。

深夜0時を過ぎたガルバー会場には自慢のドレスとアクセサリに身を包んだ男女がひしめき合い、それぞれのグループで写真を撮ったりダンスをしたり特別な時間を過ごしていた。ダボっとした服で参加してしまった自分が恥ずかしい。豪華な飾り付けがされた舞台には大掛かりな楽団と歌を披露する女性歌手がずらりと並ぶ。それまで滞在していた村でのお祭りの音楽は、簡易的なスピーカーにBluetoothを繋げただけのものだったので生演奏の贅沢さに圧倒された(写真2)。

しかし、踊り始めると違和感に気づく。祭壇を中心に円を描くように踊る男女は水と油のように分断されている。踊っていない人たちにしても、男女混合のグループはなく、ましてやカップルのような仲睦まじい男女は見受けられない。バイクで相乗りしていた男女も大抵がカップルではなく、兄弟か親戚らし



写真2 ガルバー会場

い。そして、女の子のグループは保護者として1人は母親を帯同して参加していた。

一緒にいた彼女に「こういう時カップルでは参加しないの?」と聞くと、「そんなところ家族に見られたら噂になっちゃう」と言われる。一見すると開放的なお祭りの空間にインド的な規制が見えた気がした。

女の子たちの結婚観

ここでは開放的な部分と保守的な部分が混ざり合っている。特に、大学で教育を受けた若者は親世代との認識の違いに葛藤を感じているように感じた。私が現地で会話をした女の子たちは皆、自由恋愛か結婚をしないという選択を望んでいた。「どうして好きじゃない人と結婚しなければいけないの?」「せっかく大学で勉強したのに結婚したら働けないかもしれない」「世界にはいろんな問題があるのにどうして自分の子どもがもてるの。もし子どもが欲しいなら孤児院から引き取りたい」という意見が聞こえた。彼女たちは自分の意見を強くもっていてとても素敵に見える。しかし、一方で本当にその意思を貫けるほど彼女らの家族は寛容だろうか。

ガルバーを踊った翌日、アナンド市のお宅で夕食をいただいていた時のことである。インド式のお見合い結婚の仕組みに関心があった私は、その家のお父さんに「どうやって結婚相手を見つけてくるの?」と質問をした。どうも、親戚の中で暇をしているおじさんが同じコミュニティの中から年頃の男女を見つけて勝手にアレンジしてくれるらしい。お互いの家の金や宝石などの資産がある程度釣

合っていたら結婚相手として相応しいとみなされる。そして、当然のことながら結婚する当事者同士が相手について納得することで婚約となる。今の時代、結婚式の日には相手を初めて見るなんてことはないらしい。

彼の娘は今年で21歳である。彼女は来年から大学院に進む予定で2年後には就職を考えている。一緒に食事をとっていた彼女に何となく「結婚したい?」と聞くと気まずそうに笑って首を横に振った。彼女のお父さんは「なんで?」と冗談っぽくジェスチャーをする。私が「結婚するより自由でいる方がいいよね」と笑って言うと、「本当にそう!」と私の肩を掴む勢いで同意してきた。大学で学ぶ彼女は他の若者と同様にインド的なお見合い結婚には肯定的ではなかった。しかし、彼女の意思表示の場はここで終わり、お父さんからの結婚がいかに素晴らしいかという長い話が始まる。コミュニティとしては女の子には19歳で結婚してほしいんだという話まで始まった時には私も気まずくなってしまった。

彼は何度も「娘が望まないなら結婚しなくてもいい」とか「娘の幸せが一番」とか弁解を挟むものの、あまりにも結婚への圧力が強い。娘を結婚させることが父親としての義務であると熱弁する。この猛烈な圧力の中で「結婚しない!」なんて言えるだろうか。娘がお祭りのために朝帰りをするのを許すような人だったので、これほど強く結婚に固執していることに驚かされた。一応私の目を見ながら結婚の仕組みを教えるていで話をするものの、間違いなく娘に向けたメッセージとし

て言葉を選んでた。彼女は「はいはい」と言うようにずっと口だけニコリ笑って目を伏せて頷く。

保守性と方便

人は口で言うこととやることが一緒とは限らない。家族には菜食主義と言いつつ外で卵や鶏肉を食べる人は多い。酒も実はそれほど難しくない方法で違法に手に入れることができるらしい。一見開放的なパーティーも実は見えない規制があり、「娘の自由」とは言いつつ実際には結婚して欲しくてたまらないこともある。

私はウシの調査のためにグジャラートを訪れていたのだが、クリシュナというウシ飼いの神様が祭られる寺院の目の前で白色の綺麗なメスウシが棒で叩かれまくっていることにも驚いた。「ウシはみんなのお母さん」と言いつつ、都合が悪ければそのお母さんを排除することにも躊躇はない(写真3)。そのすぐ横ではそのウシと全く同じ形をした置物が売られている(写真4)。

嘘も方便とはいうが、聞けば聞くほど内実



写真3 寺院を彷徨うウシ



写真4 クリシュナを宿すウシの置物

は理想の保守的な生活とは異なっていたりする。公的な場所では世間に聞こえがいいことを言いつつも、私的な空間では個人にとって都合が良い選択をする場合もある。しかし、この物事の見えにくさの中にフィールドワークのおもしろさがあるのかもしれない。外国人で現地語がほとんどできない私の耳に入ってきたそういうギャップは氷山の一角だと思う。保守的な空間と其中で生きる人々のバランス感覚をより身近に体験したいと思えた経験であった。帰国する頃にはグジャラートの雰囲気すっかり魅了されていた。

総括

40日間と短い滞在ではあったものの、カルナータカ州とグジャラート州のどちらも私にかけがえのない経験をさせてくれた。カルナータカは交通渋滞を除く全ての物事が快適すぎるあまり、その頃からグジャラートに行きたくないと愚痴をこぼしていた。後ろ向きな私に、「人生の可能性は常に無限であって、グジャラートで思いがけない出会いがあるかもしれないのだから常に心をオープンにしま

ければいけない」と語ってくれた NGO のプリータムさんにはとても感謝している。実際、予想外の良い出会いがありすぎた結果、今、調査地選びに迷うという嬉しい悩みを抱えている。どちらを選んだにしてもおそらく後悔はないだろうという確信があるのがとても救いである。

引用文献

- 応地利明. 2012. 「グジャラート」辛島昇ほか編『南アジアを知る事典』平凡社, 219-220.
- 岡山誠子. 2017. 「インド・グジャラート州における反ムスリム『暴動』をめぐって—『暴動』生産の政治と市民社会」『アジア研究』63(1): 27-45.

ヒマラーヤと動物と人と

秋 田 日 和 *

レーの街とインダスの水

2024年秋、私はインドのラダックに来ていた。ラダックでフィールドワークをするのは今回が初めてだ。主都レーの空港に降り立つと、鋭い日差しが目に刺さり、視界が眩む。その眩しさと暑さ、何よりも眼前に広がる荒涼とした山々が第一印象だった。

ラダックは、インド最北部のヒマラーヤ山脈西部に位置する。東西南北を4,000 m ~ 8,000 m 級の山々に囲まれた高標高、乾燥地帯である。デリーから飛行機でひとつ飛びに来ることができるレーでさえも、標高は富士山の八合目よりも高く、空港で高山病になる観光客もいるという。幸いにして私は体調を崩すことはなかったが、電波圏内にいるうちに雑務を済ませることも含めて、レーに数日



写真1 主都レーに流れるインダス河の水

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

滞在してから調査地の村に向かうことにした。

レーに到着した次の日、泊まっていたロッジのすぐ隣に水路があったので、これはどこから引っ張ってきているのかとスタッフの人に尋ねると、「これはインダス河の支流だよ」と返ってきた。いきなり世界史の授業でしか聞いたことのない言葉が出てきたことに驚いた。ラダックの地形は、ラダック山脈、カイラス山脈、ザンスカール山脈、カラコルム山脈と、それらの間を東から西に流れるインダス河の深い渓谷によって特徴づけられる [煎本・山田 2023]。ラダックを貫くように流れているインダス河は、その後古代インダス文明の地であるパンジャブ地方で5つの河と合流してアラビア海へと注ぐ。日本人の私からすると教科書の中の言葉でも、ラダックの人々にとって、インダス河は生活するうえで欠かせない大切な水源なのだ。ロッジや車といった現代的な発展のすぐ隣に、古代から続く大自然が広がっている歴史の深さを感じた。

スカルマさんの話

数日後、いよいよ調査地の村に向かう。最初に向かうのは、レーからジープで半日ほどのリンシェッドという村だ。道中、案内してくれるスカルマさんと色々なことを話した。スカルマさんはラダックで生まれ育ち、現在は「ジュレー・ラダック」というNPO法人を立ち上げて日本とラダックをつなぐ活動をしている。娘さんが私と同年代だそうで、ラダックでの生活について親身に相談に乗り、

便宜を図ってくれたありがたい人物だ。スカルマさんは、ラダックを訪れる日本人にはもちろんのこと、行く先々の村でも有名人で、ご飯を食べていたり泊まっていたりするよう引き止められていた。

そんなスカルマさんと話したことのひとつは、道路のことだ。ジープで走る村への道はわりあい舗装されていて綺麗なように感じた（もちろん日本の道路と比べれば多少ガタガタはしているが）。私が昨年訪れたネパールでは、同じような規模の都市間移動でも、バスやジープは激しく揺れ、必ず車酔いしたのに、すぐ隣の国で、なぜこれほど違うのだろうか。それについて尋ねると、スカルマさんは、「インドはディシプリンがないだけ。資源とかはあるんだ（だからネパールより道路が綺麗）」と言った。それに続けて、「モディ（インドの現首相）の前はもっと酷かった。でも発展はしたけれど、環境に良くないから発展が良いとは一概に言えない」とも言った。たとえば、ここでの主食のひとつは大麦だが、その脱穀に昔はヤクやディモ（メスのヤク）などの動物を使っていた。しかし、生活の現代化に伴ってトラクターが導入されるようになると、動物が野放しにされるようになったり、機械から出たスモッグが上空に上がって、水が汚れるようになったりしたという。「ニュースタイルが続くと、便利だけど良くない」という言葉には、身をもってラダックの環境の変化を感じてきたスカルマさんの実感がこもっていた。

スカルマさんの話でもうひとつ印象的だったのが、彼がSMAPの「世界に一つだけの

花」が好きだという話だ。上記のようなラダックの環境の変化を憂う話や、持続可能な社会について熱く語るスカルマさんに対して、私は「スカルマさんのように、他者のことを思いやったり、自分が生まれ育った土地のことを良くしようと行動したりしているのはすごいと思います。私は自己中心的な性格なのでできないと思います」と素直すぎる感想を述べた。すると彼は「自己中心的なのはアホですよ～」と上機嫌に笑った後、「私は日本の歌だと、SMAPの『世界に一つだけの花』が好きなんです。No.1にならなくてもいいんです。自己中心的だからNo.1になろうとするんですよ」と話してくれた。私はそこまでの境地にはまだまだ辿り着けそうもないが、何かこの先のフィールドワークのヒントになるような言葉をもらった気がした。

リンシェッド村での生活

さて、おしゃべりをしながらもジープは山道をひた走り、リンシェッド村に到着した。しばらくはここでホームステイをしながら調査することになる。レンガと石でできた伝統的な造りの家に通され、優しそうなお母さんに出迎えられる。その足元には明るい茶髪を辮髪にした小さな男の子が纏わりついているが、私が声をかけても恥ずかしがって寄ってこようとはしない。スカルマさんと一緒に昼食をご馳走になり、彼はレーへと帰っていった。ちょっと休憩して身の回りの片付けをしていると、上の子たちが学校から帰ってきた。「たち」と言ったのは双子の男の子と女の子だったからだ。「ホームステイする家は

子どもがいる家が良いです」とスカルマさんにリクエストしたところ、7歳の双子の男女と3歳の男の子、そしてその両親という5人家族の家に泊まらせてもらうことになったのだ。

そしてこの子どもたちが、とんでもなくやかましかった。3人で仲良く遊んでいるかと思えば、5分に1回は誰かが泣いている。静かにお絵描きをしているかと思えば、勝手に私の部屋に入ってお土産の折り紙を撒き散らしている。もちろん、騒ぎのたびにお母さんに怒られ、いたずらが酷い時には細い竹でピシピシとはたかれる。常にドタバタしていて、そんなところに私まで来たのが申し訳なくなるくらいの騒がしさだった。

そんな賑やかな家庭の中で、私は日々、子どもたちについて学校に行ったり、学校に行かない日はお父さんお母さんの農作業の手伝いをしたりしながら過ごしていた。主都のレーでは現代的な日常とそのすぐその隣にある自然との結びつきを感じたが、この村ではそれに加えて動物とのつながりも深く感じた。

動物とは、ヤクやディモ、ロバやゾー（ヤクと牛の雑種）などのことだ。この村の主な生業は農業と牧畜なので、この家でも何頭かヤクやディモを飼っている。ある日の夕方、長男ゲレックスが彼らに残飯をあげていた。毎日の人間の調理や食事の際に出た野菜くずや残飯は、ひとつのバケツに入れて貯めておくのだが、それがヤクたちの餌になる。収穫した大麦を製粉所に持っていったりする際は彼らの背に乗せていくし、ミルクはバターや



写真2 デイモに残飯をやるゲレックス

チーズになる。ここで生活するうえで、ヤクたちは欠かせない存在だ。

労働力としての使役やミルクの利用だけでなく、ヤクは糞まで余すところなく利用する。またある日の夕方、次男タシに「シラン」と言われついていくと、彼は家の裏に行き、小さなツェポ（竹籠）を背負った。シランというのはヤクの糞のことだ。昼間は村の中に自由に放されているヤクたちだが、草を食んではそこら中に糞をする。その糞を拾い集めて燃料にするのだ。それにしてもこんなに小さなツェポは初めて見た。通常のツェポは、大人が使うものなので、大人の手で一抱えくらいの大きさがある（ちなみに、素材も村によって竹や草などさまざまで、村の老人が手作業で編んで市場で売っている）。タシは小さな自分専用のツェポを背負って、畑を歩いて行く。そして、落ちていたヤクの糞を見つけると、ツェポを下ろしてしゃがみ込み、糞を地面から剥がしてはこれに入れていく。その繰り返しだ。もちろん私も一緒に拾っていく。最初は、まだ瑞々しい糞に素手

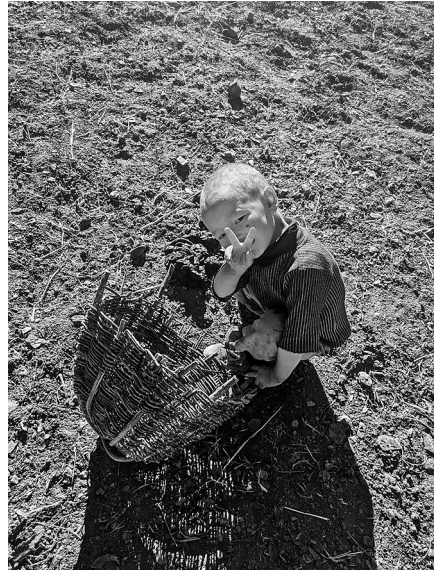


写真3 ヤクの糞を拾うタシ

で触れることに少なからず抵抗があったが、ヤクも私たちと同じようなものを食べているのであまり臭いが無いことに気づくと、その抵抗も薄れていった。そして私がどんどん糞を拾っていくことを心得ると、最初は自分が背負える分しか拾っていなかったタシが、私にツェポを持たせ、満杯まで糞を拾っていくようになった。おいおいと思いつつ、少しだけだが、私も家族の一員として働くことを認められたような気がした。

こうして集められた糞は、一度畑や家の裏など、ある程度開けた屋外のスペースにまとめて広げて、乾かされる。ラダックの強い日差しに当たれば、数時間～半日程度で糞はパサパサになり、臭いも全くなりなくなる。乾燥した糞は、茶の間の暖炉兼かまどの燃料となり、家を暖めたり、鍋の熱源となったりする。



写真4 ロバの背に乗せて大麦を製粉所に運ぶ

夕飯の食卓に目をやれば、主食の大麦もスープの野菜も全て自分の畑で育てたものだ。料理や洗濯に使う水も、村を取り囲むヒマラヤの山々の雪解け水が、パイプを通っ

て家の前まで来ている。大麦はヤクやロバを使って運搬し、寒さが和らげばゾーを使って畑を起こす。そして、餌やりや糞拾いの例からも分かるように、小さな子もおのずとそれら一連の作業に関わりながら生活している。お父さんは「子どもたちが家のことを手伝うのは、将来の練習だ」と言っていた。電気が通っていたり、スマートフォンを使うようになったりしていても、その根源にはヒマラヤの大自然と動物、そして人との共生という生き方のスタイル、言い換えれば日常生活の行動ひとつひとつが生きることに直接結びついているような感覚があると感じた。私はまだラダックに通り始めたばかりだが、そのような人々の生活から多くのことを学んでいきたい。

引用文献

煎本 孝・山田孝子. 2023. 『ラダックを知るための60章』明石書店.

漁獲漁業と養殖業のはざままで

—カンボジア漁業における養殖業の拡大—

岡田 龍樹*

はじめに

「ババババババッ。」午前4時、まだまだ

暗い村にエンジン音が響き渡る。大きな音が近づいては遠ざかっていく。出漁の音だ。漁

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

船のエンジン音は5時半ごろにピークを迎え、ひっきりなしに聞こえる。村では、ニワトリの声よりも漁船のエンジン音が目覚ましである。船外機（エンジン）の付いた5mほどの小型船を走らせ、漁業者は出漁する。ここは、東南アジア最大の淡水湖トンレサープ湖畔はコンボンクレアン行政区（KK区）の漁村、私のフィールドである。

カンボジア最大の漁村—コンボンクレアン行政区

この漁村の定置網漁では、気温が低い午前中に漁を行ない、昼前には帰ってくる。獲れた魚のうち、特に高価な魚は湖上の仲買人に売る。それ以外の魚は、船に乗せたまま家に隣接した船着き場にもっていく。接舷し、魚を水揚げしているうちに、人が集まってくる。家族や近所の人と雑談しながら、水揚げした魚を魚種別、サイズ別に仕分けて、ビニール袋に詰める。仕分けの後、ビニール袋に詰めた魚の重さを重量計で測り、仲買人に売る。仲買人は現金を渡す。残った魚は、家

族と手伝ってくれた人の分の魚となる。

仲買人への販売が終わると、魚を料理し、朝食を食べる。気温が高くなる昼間は、網の修繕など、家でできる作業を行なう。暑さが落ち着くとまた湖に出かけ、定置網の修理を行なう。太陽が沈むころに仕事を終え、夕食を食べ、カラオケやおしゃべりを楽しむ。夜10時には村は静かになり、漁業者は眠りにつく。こうして村の一日は過ぎていく。

KK区は、アンコールワット遺跡で有名なシェムリアップ州にあり、カンボジアで最大の漁村である。カンボジアは人口1人当たりの淡水魚漁獲量が世界で一番多い国であり、その漁獲物の大半をトンレサープ湖の豊かな水産資源に頼ってきた。トンレサープ湖が豊かな漁場たり得る秘密は、季節的に水面下に没したり陸地になったりする「浸水域」（氾濫原）にある。湖岸の広大な浸水域には、淡水マングローブとよばれる浸水林が繁茂しており、この浸水林が乾季に土壌を豊かにするとともに、雨季に魚の産卵場所や稚魚の育成場所となり、豊かな生態系を築いている。KK区も浸水域に位置し、住民は乾季には陸上生活、雨季には水上生活と半年ごとに生活様式を変える。

KK区は10の村落からなっており、総計で約1万の人々が生活を営んでいる。この行政区の起源は9世紀のアンコール朝までさかのぼるとされる。「コンボンクレアン」の語源は、「コンボン」（港）と「クレアン」（倉庫）である。「倉庫の港」という意味で、古くから荷物の集積地、漁村として栄えてきた地域であった。現在のKK区も、住民の



写真1 定置網漁

85%が漁業を営んでおり、住民の生計はトンレサップ湖の水産資源に依存している。

しかし今日、環境変化や漁獲圧の増加により漁獲漁業の将来が懸念されている。にもかかわらず、カンボジアの漁業生産量は2000年から2020年の間約3倍に拡大した。実は漁業生産量の増加は、漁獲漁業によるものではなく養殖業の拡大によるものである。

漁獲漁業の停滞と養殖業の拡大

2023年、世界の漁業生産量において、養殖による生産量が漁獲の生産量を初めて超えた [FAO 2024]。養殖業の発展が目覚ましい世界的な潮流と並行し、カンボジアの淡水漁業においても養殖業が主役に躍り出つつある。

KK区では、多くの漁業者が「獲れる魚の量が減った」、「昔いた種類も現在はいない」、「獲れる魚が昔に比べて小さくなっている」と嘆く。「今までどおりの漁獲漁業だけでは生活が苦しい」、「将来が不安だ」、「漁獲漁業だけでは、子どもを学校に行かせられない」と訴える。しかし、「違う仕事をしたいが、漁業を辞めたくても辞められない」とも言う。

カンボジア社会における市場経済の浸透、近年の物価の高騰のために、漁業者は現金収入を増やす必要に迫られている。しかし、獲れる魚の量は顕著に減り続けている。今後も漁獲漁業に依存し続けても、どれだけの利益が得られるのか、いつまで続けられるのか、漁業者は漁獲漁業の将来を不安に感じている。

漁獲漁業が停滞する一方で、KK区の養殖業は拡大し続けてきた。たとえばT村では2008年に最初の養殖池が作られ、2010年代から養殖池の数は急激に増加した。2024年現在、T村には100近くの養殖池が存在する。

養殖サイクルは半年から1年で、市場価格やサイズを見ながら出荷する。乾季の終わりで漁獲量が減る4月から6月は、魚の値段が上がるので、この時期に出荷することが多い。また、4月にはカンボジア正月があり、現金獲得のため正月前に出荷する養殖業者も多い。

KK区で池養殖されている魚は、プラー (*Pangasianodon hypophthalmus*) とチダオ (*Channa micropeltes*) の2種である。プラーは雑食性の魚で、チダオに比べると魚価が安いものの、配合飼料やもみ殻から作る安価な飼料で育てることができる。一方チダオは、プラーの2倍ほど価格が高いが、肉食性で餌に高価な天然の魚が必要である。しかもチダオは気性が荒く、餌が不十分だと共食いを



写真2 養殖池



写真3 チダオ



写真4 餌やりの様子

始めるので、常に十分な餌を与える必要がある。チダオ養殖は、いうなればハイリスク・ハイリターンなのである。稚魚を入れてから収穫まで半年から1年かかるので、低資本・低リスクで養殖業を行ないたい養殖業者はプラーを養殖し、収穫まで餌代を払い続ける資本がある養殖業者はチダオを養殖する傾向がある。

チダオに与えられる餌は湖で漁獲された魚であり、プラーに与えるもみながら飼料の約2倍の価格である。湖で漁獲された魚のうち、市場ではあまり値段が付かない小さな魚が、養殖用の「ヌイ・トライ」（餌の魚）として販売される。養殖業を営みながら漁獲漁業も行なっている世帯は、朝漁獲した魚のうち、市場価値の高いものを仲買人に売り、価値が低い「ヌイ・トライ」を自分の養殖池の餌とする。市場に販売する段階で取り除かれた、魚の内臓や頭も、「ヌイ・トライ」として利用される。これらは栄養価が低くチダオの成長速度が遅いが、通常の「ヌイ・トライ」の半額ほどなので、懐具合に応じて使い分ける。

近年KK区で拡大し続けている養殖業だが、初期参入コストの高さ、市場の不確実性、餌となる魚の値段の高騰などが障壁となり、KK区の中でも漁獲漁業から養殖業に転換するハードルは高い。このため漁獲漁業に従事する漁業者のすべてが養殖業に転換できるわけではない。

漁獲漁業と養殖業の関係

いつ、どれくらい獲れるのか計画を立てられない漁獲漁業と異なり、養殖業は数万ドルの初期コストと、毎日の餌代を払うことができれば、まとまった現金を計画的に得られる。しかも漁獲漁業にくらべて得られる利益が大きく、養殖業が最大の世帯収入になる場合が多い。しかし、KK区における漁獲漁業の衰退と養殖業への転換が、不可逆的で一方的な転換といえるかどうかは慎重な検討を要する。漁獲漁業と養殖業の間には複雑な関係や問題があるからだ。

養殖池の設置のためには、魚の産卵場や成育場となる浸水林を伐採する必要がある。浸

水林の伐採は漁業資源への負の影響を及ぼしかねない。KK区は2グループの漁業コミュニティが設置されており、地域住民が自主的に漁業管理を行なっている。漁業資源に大きな影響を与える浸水林の伐採はコミュニティ内での軋轢を生み出す可能性がある。

「ヌイ・トライ」をめぐる問題もある。池養殖、特にチダオの養殖には大量の餌が必要となる。KK区では、市場価値が低い小魚（その多くは稚魚）などを餌として利用しているため、短期的には漁業者が価値の低い小さな魚を捨てることなく販売し、収入を得られるメリットがある。一方で、餌として大量の稚魚を漁獲しているのも事実であり、乱獲、ひいては全体の漁獲量の減少をもたらす長期的なデメリットにつながる可能性もある。

今後、養殖池の密度が増えた場合、餌の食べ残しや養殖魚の糞が堆積し、土壌へ何らかの影響を与える可能性もある。さらに、国外への販路拡大が進められた場合、グローバル市場経済への組み込みが加速することも考えられる。

政府は養殖業の推進を進めているが、地域では漁獲漁業と養殖業の関係について複雑な状況があり、現状メリット、デメリットをめぐりさまざまな意見がせめぎ合っている。養殖業は住民の所得向上に貢献する一方、養殖業者と非養殖業者の間で経済格差の拡大、コミュニティ内での軋轢を生む可能性がある。また、長期的には湖の生態系を変化させ、漁獲漁業の存立基盤を脅かす可能性がある。漁

獲漁業の停滞という問題に対して、漁獲漁業から養殖業へ転換する、という単純なプロセスをたどるのかどうか、慎重に見守る必要がある。

おわりに

従来、政府機関や国際NGOが行なってきた水産開発援助は、おもに浸水域より標高が高い、農村部の住民を対象としていた。浸水域は養殖業の援助対象となつてこなかったが、地域住民が自発的に養殖業への転換を図り、池養殖業が急拡大している。特定の魚種ばかりを養殖する漁業は、バナナやコーヒーなどのモノカルチャー農業がもたらしてきた問題を繰り返すことにならないだろうか。養殖業と漁獲漁業との複雑な状況や、地域内の意見のせめぎ合いを明らかにし、浸水域の養殖業の在り方を考えることは、カンボジアにおける養殖業のさらなる発展のカギとなるのではないだろうか。

1日の始まりを知らせるエンジン音に代わり、養殖池の水をくみ上げるポンプの動力音が漁村の音の主役になるのだろうか？漁獲漁業が衰退し養殖池が浸水域に広がる光景が、東南アジア最大のトンレサップ湖にやがて来るのであろうか？引き続き、カンボジアのフィールドを見つめていきたいと思う。

引用文献

FAO. 2024. *The State of World Fisheries and Aquaculture 2024: Blue Transformation in Action*. Rome: FAO.